

帝国のプロパガンダ・テクニーク

【訳者注】昨日（10/4）のNHKニュースが、相変わらず「シリアの停戦合意をロシアが破り続けている」と言っていた。この論文によると、アメリカではメディア不信がかなり進んでいるようである。日本でも、こんなものに騙されない人が増えたものと考えたい。冒頭に、彼らの常套手段は「犠牲者に加えた同じ犯罪行為をもって、犠牲者を非難することだ」と言っているように、手口がパターン化していることに気づくべきである。NHKも公平な報道のためには、米露の主張が正反対であることを、はっきり言うべきである（あえて軍配の必要はない）。これはあまりにも悪質なプロパガンダで、ここでも触れている（ロシア報道官に挑戦された <http://www.dcsociety.org/2012/info2012/160920.pdf>）サマンサ・パワーの発言がその好例である。

しかし、こういうことやり続けていけば、効果を失うのは当たり前で、現に世界から嘲笑の的になったという。当然であろう。ここで面白いのは、シオニストの「ホロコースト・カルト信仰」とここで言われている奇怪な思想である。自分たちほどの苦しみを受けた者は歴史上他にいないのだから、自分たちは誰よりも他者を苦しめる特権をもつ、という一種の信仰である。これが「アメリカ例外（特権）主義」と重なれば、彼らサイコパスはいくらでも凶暴化するであろう。想像できない恐ろしいことが起こるだろう。いずれにせよ「純粋な悪」という概念が、これによってますます純化される。

Prof. James Petras

Global Research, October 3, 2016



のプロパガンダを、必ずその前後に伴っている。

恒久的な一極権力を求めるワシントンの追求は、組織的で永久的なプロパガンダ戦争によって支えられる。あらゆる大きな、また小さな戦争は、一般の承認を確保し、犠牲者を利用し、批判者を誹謗し、狙った敵を非人間化し、自分の同盟者の協力を正当化するために目論まれた、情け容赦のない政府

役割を裏返す

帝国の宣伝担当者の常套手段とする共通のテクニックは、**犠牲者に加えた同じ犯罪行為をもって、犠牲者を非難すること**である。ISIS - テロリストと交戦中の、シリア政府軍兵士に対して加えられた米 - EU の、完全に記録された、故意の、持続する、空からの爆撃は、200近いシリア軍兵士を殺し、傷害を負わせ、ISIS - 傭兵が彼らの陣地を踏みにじるのを助けた。自分たちが敵対していると主張する、そのテロリストそのものを空から援護したペンタゴンの役割から注意をそらそうとして、プロパガンダ機関は、国連の人道的救援車両隊への空からの攻撃という、残忍な、しかし根拠のない物語をつくり出し、最初これをシリア政府の仕業とし、次にはロシアの仕業だとした。これがほとんど確実に、ISIS - テロリストによる地上からのロケット攻撃だったという証拠は、プロパガンダ機関に影響を与えなかった。このテクニックは、証拠を取られた帝国の爆撃機による犯罪的攻撃から、米 - ヨーロッパの注意をそらし、犠牲者であるシリア軍とパイロットを、国際的な人権に対する犯罪者に見せかけるものだった。

ヒステリックな喚き散らし

シリアにおける国際的な停戦合意の気まぐれな侵犯に対する、世界の一斉非難に直面して、帝国の公的報道官たちは、しばしば、国際会議において、理性を失った暴言に訴え、態度の定まらない同盟国をおどして黙らせ、敵にされた国の具体的な問題を解決する、理性的な討論のどんな機会をも閉ざしてしまう。



国連での、現在の“アメリカ喚き係長”は、サマンサ・パワー国連大使で、彼女はロシア政府に対して毒舌を浴びせかけ、最近のシリア停戦の米による故意の侵犯（シリア軍への犯罪的攻撃）について提起された国連総会の討議を、阻止しようとした。真面目な外交官たちの間で、理性的な討論をする代わりにこのように喚き散らすのは、会議の進行を脱線させるだけだった。

反帝国主義運動を無力化するアイデンティティ政治

帝国は普通、それを運営する者の、人種、ジェンダー、宗教、民族性による特性をもつ。帝国のプロパガンディストは、しばしば、黒人や少数民族、女性リーダーや代弁者を、自由に

選び、墮落させることによって、反帝国主義運動を弱体化し、無力化させる戦略を取ってきた。このような“象徴的”代表者を用いることは、これらの人々が、いわゆる“周辺の少数者”の真の利益を代表し、したがって、“世界の抑圧された人々を代弁する”という想定に基づくものである。このような従順で尊敬に値する“少数メンバー”をエリートに引き上げることは、“革命的な”世界を解放する出来事だとして宣伝される——バラク・オバマ米大統領の“選出”がよい例である。

2008年のオバマの大統領への出世は、いかに帝国プロパガンディストが、階級闘争・反帝国闘争をひそかに切り崩すために、アイデンティティ政治を用いてきたかを示している。

オバマという歴史的な黒人大統領の下で、アメリカは、南アジア、中東、北アフリカの“有色人種”に対する7つの戦争を仕掛けた。百万以上のサハラ以南黒人系の人々が、リビア市民であろうと近隣諸国の契約労働者であろうと、米-EUによるリビア破壊の後、米同盟国によって殺され、財産を奪われ、追放された——人道的介入の名のもとに。何十万というアラブ人が、“歴史的黒人大統領”であるオバマ大統領のもとで、イエメン、シリア、イラクで爆撃を受けてきた。オバマの“猛禽ドローン”は、何百人ものアフガニスタンやパキスタンの村人を殺した。これが不名誉なオバマにノーベル平和賞を与えた、“アイデンティティ政治”の魔力である。

一方において、オバマの下のアメリカでは、黒人と白人労働者間の人種的不平等（賃金、失業率、住宅、医療、教育）が拡大している。黒人に対する警察暴力が増え、“殺人警官”の罪は問われない。2百万以上のラテンアメリカ移民労働者が追放され、何十万という家庭が破壊され、これ以前の政権下と比較して、弾圧が格段に強化されている。何百万という黒人と白人労働者の住宅抵当権が奪われる一方で、すべての腐敗した銀行は救援金を与えられている——白人大統領の下ではかつてなかった額で。

この露骨で冷笑的なアイデンティティ政治の行使は、帝国戦争、階級搾取、それに人種排斥を長期化させ、より深刻にした。象徴的な代表を立てることによって、本物の変化のための階級闘争が切り崩された。

現在の搾取を正当化するための過去の苦しみ

帝国プロパガンディストは、繰り返し過去に被った犠牲や虐待を口にするが、これは、彼ら自身の侵略的な帝國的介入を正当化し、彼らの植民同盟国——特にイスラエル——による土地略奪や民族浄化を援護するためである。過去の犠牲や犯罪が、現在の被害人民に対する現行の野蛮行為を正当化する消されない存在として、突きつけられる。

米 - イスラエルによるパレスチナの植民地化という事件は、いかに凶暴な犯罪、略奪、民族浄化、それに自己富裕化が、過去に被った犠牲という言葉を通じて、正当化され栄光化され得るかを明瞭に例証する。米とイスラエルのプロパガンディストは、“ホロコースト・カルト信仰”を創り出し、ほとんど1世紀前の、ユダヤ人に対するナチスの犯罪を崇拜し、アラブ人の土地や主権の血なまぐさい征服と略奪を正当化し、レバノンやシリアに対する組織的な軍事攻撃を許容している。何百万というイスラム教徒やキリスト教パレスチナ人が、恒久的な追放へと追い立てられている。エリートの、富裕でよく組織された、強い影響力をもつシオニストたちが、第一にイスラエルに忠誠を誓い、中東における現在のあらゆる平和努力を見事に破壊してきた。そして軍国主義と帝国建設の推進を通じて、アメリカの社会民主主義に対する真の障害物を築いてきた。過去の犠牲者を代表すると主張する者たちが、現在のエリートの中でも最も苛烈な圧政者になった。彼らは“防衛”を盾に取って、拡大と略奪の侵略的な形態を推進している。彼らは、彼らの“歴史的苦しみ”の独占が、礼儀ある行為のルールからの“特別の免除”を与えたと主張する。彼らのホロコースト・カルト信仰は、強烈な苦痛を他者に与えることを許し、一方、どんな批判をも、“反ユダヤ主義”として非難し、批判者を無慈悲に処罰している。帝国のプロパガンダ戦争における、彼らの主要な役割は、苦しみの権利の独占と、正義の規範からの免除という、彼らの主張に基づいている。

軍国主義舞台での娯楽的見世物

娯楽的見世物は軍国主義を栄光化する。帝國的プロパガンディストは、本来は信頼されない指導者の推進する不人気な戦争を、一般大衆につなぐ役目をする。スポーツの大会では、戦争の英雄に扮した兵士たちが、扇動的な“国旗崇拜”のショーを行い、進行中の海外の侵略戦争を称える。こうした思考を麻痺させる、粗野な宗教性の要素をもつ派手な行事は、観客に国家への忠誠の演技的表現を要求するが、これは海外での継続する戦争犯罪と、国内での市民の経済的権利の破壊を隠すためである。

人気の高いミュージシャンやエンタテイナーが、大衆に対して、戦争を人道主義的に見せかけながら演出する。エンタテイナーたちの微笑する顔は、大統領の温和な、親しげな顔が、彼の胸のうちの軍国主義と一体であるように、強力に、民族抹殺に奉仕している。プロパガンディストの観客へのメッセージは、「あなたの鼻唄チームや歌手が今ここにいるのは、我々の高貴な戦争と、勇敢な戦士たちがあなたを解放してくれ、今、あなたに楽しんでほしいと思っているからだ」というものである。

ただ、この古い様式の見え見えの、好戦的な、大衆へのアピールは、今使われなくなった。新しいプロパガンダは、娯楽と軍国主義を合体させ、支配エリートが、観衆の経験の邪魔を

することなく、その戦争への無言の支持を得られるようにしている。

結論：プロパガンダという帝国のテクニークは効果があるか？

現代の帝国のプロパガンダ・テクニークは、どれくらい効果があるだろうか？ その結果は一様ではないようだ。最近数か月、エリートの人種差別主義者が、要求された国旗崇拝の演技に背くことによって、白人の人種差別に抗議するようになった。そしてこれが公的な論争の種となって、警察の野蛮行為や、持続的な差別扱いという、より大きな問題に発展している。アイデンティティ政治は、オバマの選出を実現させたが、これは階級闘争や人種差別裁判、反軍国主義、それに継続する帝国戦争の影響の問題に、道を譲るかもしれない。

ヒステリックな喚き散らしは、まだ国際的な注目を引き続けるかもしれない。しかし繰り返されたパフォーマンスは、そのインパクトを失い、“喚き屋”を嘲笑の的にし始めている。

被害者信仰のイデオロギーは、アメリカからイスラエルへ莫大な金額が渡る根拠というよりは、イスラエルのためにアメリカ政治家の援助を要求するシオニスト募金者の、圧倒的な政治的・経済的な権力と殺人活動の根源になっている。

アイデンティティ政治を振り回すことは、最初の数回は効き目があったかもしれない。しかし、黒人、ラテンアメリカ人、移民などすべての不当な扱いをされた労働者や、すべての低賃金で過剰労働の女性や母親は、必然的に、空疎な象徴的ジェスチャーを拒否し、中身のあつた社会 - 経済的な変化を要求している——そしてここで彼らは、大多数の不当に扱われた白人労働者と共通の絆を見出す。

言い換えると、存在するプロパガンダの手口はその効力を失いつつある——企業メディアのニュースはインチキと見破られている。ひとたびゲームが始まったら、誰が、俳優兵士や国旗崇拝者に従うだろうか？

帝国のプロパガンディストは、大衆の注意と服従をつかむための新しい手段を見つけようと、必死になっている。最近のニューヨークとニュージャージーのテロ爆弾事件は、大衆のヒステリーと更なる軍国主義化を誘発することができただろうか？ それらは海外での更なる戦争を隠すことに役立っただろうか？…

Military Times に載った最近の調査によると、現役の米兵士たちの大多数がこれ以上の帝国主義戦争に反対している。彼らは本国での防衛と社会的正義を求めている。兵士と退役軍人たちは、丸腰の黒人男性が通りで警官に殺されている一方で、国旗崇拝に参加するのを拒

否した黒人選手の抗議を、支持するグループをさえ作っている。何十億ドルもかかる選挙プロパガンダにもかかわらず、選挙民の 60 パーセント以上が、両大政党の候補者を拒否している。現実原理がついに国家プロパガンダを覆し始めた！